

ジョン・ダン その生涯と精神と芸術

7. 死 (翻訳) その2

Translation of John Carey: *JOHN DONNE Life, Mind and Art*

7. Death Part 2

後藤 廣文
Hirofumi GOTOH

1619年ドイツへの旅立の準備をしている時も死のまねごとを楽しんでいるのが見られる。この旅行を自殺の勝利の場にしようとしたのである。そのために、旅行中『自殺論』を安全に保管してもらうためにカーに送ることになったのである。また、モンゴメリー夫人には自分は「王国を出ることになっています（恐らくこの世からも）」⁵¹⁾ という手紙を送っている。リンカーズ法学院の幹部たちへのお別れの説教で、ダンはここの神学講師であったので、自分が永遠の門のところにいる人物として話し、自分を信仰の篤い幹部たちを導く人物として想像している。「もしあなた方に死の門を通る時に会えなくても天の門であなた方皆に会って、私はそこで私の救世主、あなた方の救世主に向かって、救世主が彼の父や我々の父に向かってあなたが私に与えた給うた者の内誰一人として私はなくすことはなかったと言ったのと同じ事を私は言います⁵²⁾。」ダンは想像の中ではよく目立つ力強い勇気づけられる天の門に到着しているのである。

実際のところ、1619年のこの旅行に災難を予測する根拠はほとんどなかった。とはいえ、17世紀の旅行は危険が多いのも事実でダン自身は健康に不安を感じていたし、ダンはこの旅行で体力を消耗すると信じていたとウォルトンは語っている。ジェームズ I 世がドイツ皇太子に送った使節団付司祭としておもむくことになっていた。ドンカスター卿率いるこの使節団はとてつもなく費用のかかる一行であった。一行の貴族、騎士、紳士の数が相当数にのぼり、ブリュッセル入市儀式には25~30台の四輪大型馬車が必要であった。ドンカスター卿の「大陸旅行の虚栄」は本国の人たちの不平不満を引き起こしており、特に旅行の出費に当てるために公的資金から1万4千ポンドを支払った時には不満が大いに募った。ダンにはこれ以上楽で安全な旅はなかったであろう。にもかかわらず自らに背負わされた運命のいとまごいが仰々しく表されている。絶望を表すために書いた詩「キリストに捧げる賛歌、著者が先年ドイツに旅するに際して」の中で難破か溺死は避け難く、彼を乗せることになっている船が航海に適するの大きな不安が暗示されている。これらが「悩める心が生む病める空想」⁵³⁾ と言われて来たものである。しかし、ダンの自己劇化したくなる気持ちが何かとても大きな力に満ちたものを生み出すので、そうではなくて旅に伴う危険をもっと現実的に評価すべきだと言った所でありあまり意味はないということを知った上でこの詩を読めばいい。

どんなに引き裂かれた船に乗っても、
その船はあなたの箱舟の象徴なのだ。
どんな海が私を呑み込んでも、その洪水のような海は
私にとってあなたの血の象徴となるであろう。
怒りの雲の背後にあなたが顔を隠しても、
その覆いの向こうにあなたの眼差しを知る。
それは時には私からそれることはあっても
決して軽蔑の眼差しではない。

この島国をあなたに捧げ
私が愛した人、私を愛してくれた人も、全てを捧げて。
これらの人たちと私との間に海が広がっていく時には、
私の罪とあなたの間に海を広げてください。
冬になると樹液が根元に下がるように、
今や私の冬、私は落ちていく。
そこではあなたを除いては、真の愛の永遠の根元を
誰も知ることはできない。

あなたも、あなたの宗教も、あなたを慕う美しい調に
溢れた魂の愛情を抑えようとはなさらないはず。それどころか、むしろ
その愛を自分だけで独占しようとされるだろう。あなたは
嫉妬深い。そこで主よ、私も嫉妬深くなることにします。
もっと多くを愛することから私の魂を解き放って下さらなければ、
あなたは私を愛していない。自由を与えるものは自由を奪う。
あなたが誰を愛しても構わないと言われるのなら、
ああ、あなたは私を愛していないのだ。

さあ、この離縁状にあなたの印を押して下さい。
かすかな愛を注いだ全てのものと別れます。
若い頃に（偽の恋人である）名誉・才知・出世に分散していた
これら愛を、あなたと結婚させて下さい。
祈りのためには、光の一番少ない教会が最もよい。
神だけを見るために私は闇に向かう。
嵐のような日々から逃れるために、
永遠の夜を選んだ⁵⁴⁾。

ダンは事実を歪めているわけではないが、一つ二つの断片的なものを舞台装置として取り上げるだけでその他は捨てて使節団の現実の有様を全て省略している。豊かな馬車の荷物、使節団は、ダンはどちらかといえばそれ程重要ではない随員ではあったが、跡形もなく消え失せている。同様にダンが船の上でぼんやり、悲しそうに、一人たたずんでいて今にも消えかかるかのように思われるほどである。「引き裂かれた船」は妙に小さくなって行く。あえてぼろぼろになったホロのついたカヌーで海峡を渡ろうとしているかのようだ。しかし、船が小さくなるにつれてダンは大きくなるように思える。彼の身振り、手振りは巨大になる。「この島国を貴方に捧げ（る。）」つまり、手一振りでブリテン島は呑み込まれるのである。

この詩には野心の強い立身出世主義と世間の自分への報いに対する高慢なほどのあざけりとの葛藤がはっきりと表されている。名誉と機知と希望を断念しなければならないことは認識しているのだが、それらを断念しようとするには神の助けを求めなければならないのである。詩全体を通して達し得た放棄は勝ち誇っているかのように見えるが、実は苦々しいのである。希望を「偽の恋人」に擬人化することによって、これまで自分を落胆させてきた女性に対する昔ながらの病的ともいえる恐怖心を見出ししている。シルビア・プラスのような現代詩人の自殺の詩に、人生と人生への絶望に対する憤りを容易に見つけることができる。崇高な自殺へと心を急激に変化させることができるためにはこれ迄欺かれてきた全てのものが償われなければならない。「永遠の夜を選んだ。」という最後の行でこの詩が自殺を犯す詩であることはきわめて明らかである。ドンカスター使節団への参加が避けられない運命にあったとして自ら実情を歪めていることを実は心の中で認めているのである。闇に飛び込むときには殉教した縁者トマス・モア卿への想いが共にあったと思われることは注目に価する。光の最も少ない教会が最も祈りにふさわしいというダンの一行はモアの『ユートピア』に描かれている教会を想起させる。ユートピアの人たちは闇が信仰心を強めると信じているので『ユートピア』の教会は光を遮断するように設計されているとモアは言う⁵⁵⁾。「神のみを見る」ために死の想いを抱くことで殉教の魅力をみせかけるのである。しかし、ダンには典型的なことだが、詩はこのクライマックスで大きい。しかし解決することのできない矛盾をはらむことになる。というのはもしダンが神を見るために死ぬのであれば、全く「永遠の夜」を選ばないことになる。そうなれば永遠の夜は異教のもの、自殺に関するセネカの伝統に繋がるものであり、全くの非キリスト教徒ということになる。崇高な不一致ながらダンがしようとしていることはこの詩の最後で異教徒の自殺という壮大な終局と殉教によるキリスト教徒の神との一体化への渴望の両方を不当にも自分のものにしようとしていることである。いずれの偉業にしてもやめるのは耐えられないのでこの二つを差し迫った不一致として並べられ主張されるのである。

最後に神学者としてダンが死をどのように想像していたかということを探る必要がある。彼の想像には、自殺のような死を生き生きと劇的に描写したりあるいは『歌とソネット』に見られるような果てしなく存在し続ける不幸な出来事に向かう傾向があることは既に見た通りである。その目的は死から死に至らしめるものを取り除き、死を自己の拡大行為に変えることである。既に論じたように神学というものは究極的には想像による他はなく、宗教思想家としてダンには自分の想

像にふさわしいキリスト教徒としての死の諸相を選ぶことを期待すべきなのである。死後何が起こるかという思索は、死については実際何も知ることはできないのだから、文字通りとどまるところがない。従って、想像したものの膨大な組み合わせの中から自分で選ぶことができるわけで、その選んだもの（実際には彼が残しておいたもの）が明らかになるのは避けられない。

ダンの心に絶えず浮かび、事実上他のいかなる永遠も隠してしまうほど詳しく語る死後の唯一の出来事は肉体の復活である。これはダンの他の死に関する記述からわかることを基に予測できることであろうということに他ならない。ダンにとって死は動きを意味するものであり復活の日は——「聖遺物」で言うところの「最も忙しい日」——前例がないほど忙しい日であろう。その日は歴史上最も多くの人々を目撃する日である。誰もが自分の肉体を取り戻そうとする。これには神や天使の側の分子を統合するという莫大な行為が必要であろう。これはダンには避けられないテーマで、ひるむことなく、気難しいダンの批評家が感じるのだが、びっくりするほど物質的に想像している。ダンの好奇心をそそるのは実質的な問題である。復活していなければならない肉体は「海に溶け液体化し、大地の中で腐敗し、火で分離して灰となり、大気に撒かれていた」かもしれない。死ぬ前から肉体の分解は始まっているのである。

腐食が食いつくし、消耗が息をし、我々の腕や手足から蒸発する肉体の原子は全てどこにあるのだろうか。大地のどんな皺や溝や腸に、千年前に焼かれて残った肉体の灰の粒の全ては、あるのだろうか。海のどんな隅に、窪みに、ノアの洪水のときに溺れたジェリー状の肉体の全ては、あるのだろうか…。我々の死体の体液の一つが虫を生み、この虫が他の体液の全てを吸い、からにし、そして死ぬ。死んだ虫が乾燥し、塵となり、その塵が風に吹かれて川の中へ、川の水を濁らせ、海へところがり、そして海の満ち引きで永遠に循環する。それでも、それでも尚、神はどの棚に種真珠があるのか、この世界の何処に人間の塵の粒一つ一つがあるのか知っておられるのである。自分の民の考えに合わせる（預言者が他の例で語っているように）と預言者がささやき、シューシューと言って、聖人の遺体を招きよせる。するとばらばらになっていた肉体が眼を輝かせて神の右手に坐っている。つまり栄光の復活である。⁵⁶⁾

このような一節を読むとダンの肉体の復活への関心が明らかに宗教的でないことがはっきりする。ダンも物資の変化に夢中になっているのだから宗教的でないのは当然のことである。死んだ人間の肉体が分解し再結合することが無限の領域にわたる物質の変化を楽しむダンの想像力の中心的役割を果たしているのである。こう考えればダンには錬金術よりずっと死体嗜好症のほうがふさわしい。

更に、ダンも神が塵を直ちに肉体に変えるその魔法のような早技が気に入ったのである。それは最終的かつ決定的なやり方で統合させたいというダンの気持ちを満足させるからである。既に見たようにダンも自分がばらばらにされ断片化されるという強迫観念に取り付かれていた。彼は世界との接続を断たれ、自分の心が絶望的な程に世界の中心から外に向いて拡散していると感じているのである。だからお祈りするときに自らの様々な努力について言いながら、「私自身がばらばらになり、溶解するのがわかる」⁵⁷⁾ のである。復活の時神は全てを正しく置き、ぴったりと適合させる。

神が闘わなければならないであろうあらゆる困難を考えるとこの魔法のような考え方が強調されるのである。手足の切断とそれにもなう大量出血が、特に海外旅行時に多いと考えると、神に様々な特別な問題を提供することになるとダンも考えたのである。再構成される肉体の「腕は東に、脚は西に、」腕はヨーロッパに、「脚は何十年の間アフリカかアジア」に失われているかもしれない⁵⁸⁾。「血液が北に、骨が南に」失われているかもしれない。従って、ある動物が他の動物を食べるたびに生まれる複雑な問題が起こることになるのである。人間が魚に食べられ、魚の肉になり、それから魚が別の人間に食べられるとしよう。そうしたら神はいかにして最初の人間と次の人間とをえりわけするのか。ダンはこの混合を楽しそうに何度も繰り返し考えている⁵⁹⁾。ある種族が食人行為をするということは、ダンが指摘するように、事態を複雑にする——よくする——だけでしかない。人が誰か他の人に食われるというには何か異国的なものが必要だからというわけではない。神は、最後の審判の日に、「人間の埋められた死体で草が育ち、その草で獣を養い、その獣が人間を養い、この人間が他の人間を食べる。」⁶⁰⁾ という事実と直面しなければならない。神がなさる仕事には天地創造以来のあらゆる食物連鎖に関する詳しい知識が必要となるであろう。

ダンの復活に関する説明とダンの知っている他のキリスト教徒の注釈者に見られる説明とを比べてみるとその違いが明らかで、想像の必要上自分の神学に個人的傾向を加味しているということがわかるのである。まず、ダンにとっては大いに好奇心をそそられる問題なのだが、他の作家にとっては食人や人を食べる魚が引き起こす問題はキリスト教神学上の重要な問題ではないのである。アウグスティヌスもアキナスも共にこの問題は元々神をあざける不敬な人たちが起したもので、彼らは肉体の復活を信じることの愚かさを論証したがっている人たちだということを強調しているだけである⁶¹⁾。しかし、ダンの関心は復活そのものより再統合にあったので、これら再統合の極端な例を異常に目立たせようとしているのである。2つ目にダンは実際神はこのような難問をどのように解決するのか、アウグスティヌスやアキナスのように、説明を試みようとはしない。ダンの唯一の関心は再統合に要する力や再統合に先立つ異様な散乱状況を強調することにある。従って、ダンは神がどのようにその所有者を決定するかを考慮しなくても全てのばらばらになった肉体をその真の所有者に戻すと主張するだけなのである。

ダンは無視しているのだが、もう一つの難しい問題は物質は人体の中に永久にあるのではなく、永久に流動の状態にあるという事実に関わるものである。既に見たように、ダンは変わりやすい人生を強調する時に使う流動性を重視している。しかし、ある要因が肉体の復活に大きな障害となる。我々の肉体組織は絶えず生まれ変わるので、死ぬまでに多量の物質が肉体から出る。この内どれだけが復活するのか。神が全てを集めるとすれば、我々は天国で醜いまでに太ることになる。しかし、そうでないと完全な復活とはならない。アウグスティヌスとアキナスも共にこの難問に取り組んでいる。アウグスティヌスが最も悩んだのが髪や爪に関するものである。いずれも生涯にわたって絶えず手入れされるものであって、大量に戻されればひどく見苦しい恰好ということなる。それで彼は髪や切った爪を復活させるが、元の所に戻す代わりに、もっと丸みが得られるように、身体のいろいろなところをふくらませる詰め物として使うのだとしている。一方アキナスはこの気の利いた、無駄のない考えを認めないで、人間の形となるような必要な物質は充分復活するが、「物質

の全てということに関して言えば、全てが再び生じるのではない⁶²⁾と語っている。

これら難しい問題にダンが無関心でいられるわけはなかった。肉体は全て復活をすると信じるのと物質の流動性を信じることは両立しない。しかし、ダンはこの二つを別々に心の中に入れておき両者を道理にかなうような橋渡しをしないでそのまま認め続けているようだ。アウグスティヌスの髪や爪の復活にはダンは明らかに関心を示していないし、物質の完全な再統合を否定するアキノナスの考えもアウグスティヌス以上に受け入れられないものであったに違いない。実際のところダンはいずれについても述べていないし、二人が直面しているこの問題に対する代わりの解決策を持ち出しているわけでもない。道理にかなってはいようがないが、それが想像したいものであれば矛盾した概念であれ固執するのである。全く同じように異教徒のように飛び込んだ「永遠の夜」に固執し、キリスト教殉教者の神との再会に固執したのである。それはいずれも彼の心に訴える自殺の一つの形だからである。もちろんダンが自分の矛盾に気づいていなかったとみなすべきではない。ちりちりになった人体を神が再統合することに魅力を感じたのは正に自分自身が多様で調和がとれていないという感覚があったからこそである。

この再統合を完全なものとするためには神は人体を一つにするだけでなく、人体に再び魂を添えなければならない。そうならないと魂は不完全だとダンは力説する。肉体の再統合という考えとほぼ同じくらいに天国では肉体が必要だという考えにとりつかれていた。魂と肉体に分裂して、植物細胞の原形質の外層のような何かもろいものにしか生き残れないという予想に強く反発した。地上と同じように天国においても中身のある完全な存在であるべきだと彼は要求する。従って、復活した身体は希薄になる——「希薄にされ、薄く、捉え難くなる」——という初期キリスト教徒の考えとは対立した。しかるべきしっかりとした身体がなければ天国は不十分であって、そのために三位一体の三つのペルソナが身体を造ることになったのだとダンは論じている。「無限の、何億もの世代」にわたることになるので、ペルソナは身体を造るのを抑制しているのである。しかし、それではペルソナの栄光は完全無欠ではないのだが、「しかし、天が被造物から生れる付属物を受け入れるのだからペルソナが物質の世界、有形の世界を造り、身体を受け持つことになる」のである。身体が天国に入る問題に関してダンの関心を引いた聖書の記述はマルコ伝第12章25節で、そこではキリストが復活した人は「天使のよう」だと言っていることである。天使には身体がないのでこの言葉をダンは再解釈する必要性に迫られた。ダンは気づかわしように、たびたびこの言葉に戻って、我々は復活すると完全な魂を持った天使のようになるが、キリストの言葉が暗示するように天使は「栄誉ある肉体に包まれたわれわれのようにはならない」と説明する⁶³⁾。

魂が肉体とは離れたところにあるというように想像するのは自分にはふさわしくないと考えたので「聖なるソネット」を書いている時には、魂は肉体と共に死に、最後の審判の日に復活するという異端の見解を採った。従って、「丸い地球の想像上の四隅に立って」でダンは単に肉体だけを描くのではなく死から浮かび上がる「数限りない無限の魂」を描いている⁶⁴⁾。しかしこの理論は死を最小限のものとしつつ生き生きとさせようとするダンの気持ちには反するものである。魂がほんのわずかな時間であれ死ねば死は正に致命的である。それでこの点を大いに悩み、初期のキリスト教著作者たちが始めたように賛否両論を調べた後⁶⁵⁾魂は肉体が死ぬと直接天国（地獄）に行き、その

後に肉体と再会するという正当な考えを受け入れた。この問題に関してダンが当惑していることは明らかだし充分予想されることである。というのは二つの仮説の中から選ぶに当たって魂と肉体の融合と死を活気づけること、いずれもダンの心を深く捉えたものであるが、という二つの想像上の概念の中から選ばなければならないからである。魂は死に際して肉体とは別れること、つまり魂と肉体は不可分には融合していないことを結果的に認めることに納得していなかった。魂が孤立するのは「自然に反する」し、肉体の復活に先立って一時的に天にいるのは魂にとって不十分であり不満でもあると主張した⁶⁶⁾。ある説教で、ダンには珍しく心もとない説明をしながら死と復活との間に肉体には実際に何も起こらないのだから、死と復活は同時のものとして見ることができ、従って、魂は結局肉体と離れている必要はないとまで極言している⁶⁷⁾。「病床から神に捧げる賛歌」で同じ希望を抱いているようだ。

西と東は

平らな地図（この私のように）では一つである。

それと同じように死も復活に接しているのである⁶⁸⁾。

この絶望的な論証によって証拠が矛盾しているにもかかわらず空想的な理想が捉えられていることがわかる。

事実は明らかにダンの言うこととは違うけれど、肉体と魂は解き難く結ばれたものだと言ったダンが一生懸命に主張することから必然的に魂は肉体から離れると無能力化するという詩「恍惚」を思い出す。更にまた詩的言語を通してダンが伝える肉体の結合力に対するあの感覚やダンが「第2周年記念」に「彼女の肉体はものを考えると思われたほどだ」と書いた想像上の少女に表された人間という有機体に融合された精神的活動に関する彼の微妙な感覚を思いださせる。ダンは詩を作るときに想像力を生み出す目的で自らの神学を創り出したと見ることができる。このことを充分理解するためにはダンが追い求めた神学問題のみならず無視した神学問題をよく調べなければならない。というのは神学問題は同時に、彼の個性を決定するのに役立つからである。このようにダンは肉体の復活に異常に捉われているとあって正しいのだが、他のキリスト教徒にとって最も重要と思われる復活に関してはいくつかの点で全くと違っていいほど彼の注意を引いていないということも又正しい。例えば、復活した肉体の身長や年齢について数世紀にわたって神学者たちが熱心に議論を戦わしてきた。復活した人は皆同じ背の高さで、体重も同じかどうか、もしそうであれば小さい人を大きくするために必要な肉体をどこで神が手に入れるのかということが学識者の頭を悩ました問題であった。しかし、ダンは奇形は正常に、全ての人は天国でとても美しくなる⁶⁹⁾と一般的に受け入れられている考えに同調するどころかこういった問題に関心を持つことすら拒否したのである。もちろん、これが詩中の単なる視覚的な表れに関心がないダンを表したものであれば、正に我々の予想していることである。

復活する年齢は幼子を亡くした親にとって特別心を痛める関心事である。よちよち歩きのわが子に再び会うことになるのだろうか、それとも天国で母親として父親として挨拶する子どもがとても大きくなって見知らぬ人になっているのだろうか。ベン・ジョンソンは疫病で亡くなった幼い男の子ベンジャミンが「復活の時すっかり男らしく成長していると思う」⁷⁰⁾ とドラモンドに語っている。一方、ヘンリー・ヴォーンもまたこのことをよく考えて、子どもが次のようにより純粋になっていると感じるので、大人になっているのだけれども新生児の恰好で復活することを願っている。

前に進みたがる人もいるが、
私はもと来た道を引き返したい。
この身が塵と化して骨壺に入る時
生まれた時のままで帰って行きたい⁷¹⁾。

もっと一般的な考え、明らかにジョンソンが抱いた考えは、皆30才で、アキナスによれば⁷²⁾ この年齢は完全な身体成長を表し、またキリストが死んだ年齢と信じられていたので、復活するというものであった。この説を言い始めたのはアキナスで、彼は30才前に亡くなった人は他の人たちと同じグループに入れるように必要な年数を与えられると説明している⁷³⁾。

ジョンソンのようにダンも子どもを亡くしており、ヴォーンと全く同じように自らの不純に悩んでいる可能性があった。しかし、ダンは一貫して復活した人の若さや年齢を考えないようにしており、復活に関して別の見方に強い関心を持っているのである。最愛の子どもたちに再び会えるのを望んでいないからではないことは確かである。18才の娘ルーシーの死の直後の説教で「死んだ娘を再びよみがえらせる」と明言している⁷⁴⁾。友人コケイン夫人の18才で亡くなった息子の死を慰める手紙の中に「墓は私の子どもを私のところに戻してくれる」と書いている⁷⁵⁾。この表現はルーシーが死んだ時の年齢で彼のところに戻ってくるとダンは考えていることを示唆している。とはいえ問題ははっきりしないままで、復活に関する議論を慎重に差し控えている。議論すると支持しなくなる可能性に追い込まれることがあるのでこの問題に関しては白紙の状態にしておきたかったのだと思われる。

その理由を知るのは難しくはない。というのはもし復活したジョン・ダンが30才のジョン・ダン、あるいはその他の特定の年齢のジョン・ダンと無理に決めるとそれ以外のかつて存在したことになるジョン・ダンは復活できないことになってしまうからである。つまり、彼自身を構成するほんの小さな一部でも迷うことになることを認めることはできない程に統合への衝動に駆り立てられているので、変わりやすい定まらない自己全てが復活の時になんとしても一体となると信じるのが絶対に必要となるのである。成長の一段階を復活するために選んで欲しくはないし、残りを捨てて欲しくはなかったのである。「赤い土から生える天国のゆりのようにまとめられた」⁷⁶⁾ とダンが書いたように集められ一箇所に集中させ「縮約」させてもらいたいのである。彼を受け入れるものは誰もが彼の全てを受け入れなければならないという詩中での主張はダンの複雑さと関係がある。ダンを得るためには、「父なる神への賛歌」にあるように、神は受胎から死の床までのダンの生涯のあ

らゆる時期の罪を赦すことを約束しなければならない。それ迄は「赦して下さいたことにはならない。」ダン全てがダンなのである⁷⁷⁾。恋愛詩の中でも「花」はこういった利己的なものを含む択一的な表現形式を提示する詩である。ダンは「僕の魂だけでなく、肉体も歓迎してくれる」⁷⁸⁾ 女性を要求するのである。正にこれが復活について書くということになると天に要求することになるものである。「5本の白髪」を数える「聖列加入」の詩人は神学者と同じく、あるいはついでにいえば女性の愛のしるしが復活するまで自分の手足の溶解を防ぐようにと願う「葬式」の詩人と同じく自分自身を構成する一つ一つのものを気づかっていることを示している⁷⁹⁾。

復活される年齢には関心を示さないが、その状態には関心を持った。キリスト教の理論家たちによって祝福された天国の多くの見方の中でその栄光ほどダンの心を捉えたものはなかったし、栄光について妙に挑発的で専売特許を持っているかのような態度で語っている。天上界においてすら競争しようと思っているのである。

…私の魂が天国に入るとすぐ天使たちに私は霊なるあなた方と同じ霊からできているので、あなた方と共に並び、あなた方の神を、私の神を拝顔できるようにさせてくださいと言うであろう。同じように、身体の復活の日に、偉大なる知患者の天使、神の子、ジーザス・クライストその人に、私は、身体を持ったあなた方と同じ身体を持ち、肉体のあなた方と同じ肉体を持っているので、あなた方と共に坐り神の右手にいられるようにと行うことができるであろう⁸⁰⁾。

天国の住人たちと優劣を競ったり、彼らに自分の立派な身体に注目させようとするダンの新しく達したこのヴィジョンはばかばかしいと同時に全くダンらしいものである。死ぬにしろ生きるにしろダンは控えめであることも出しゃばらないでいることもできない。ダンの天国の概念はもっぱら非常に個人的である。天国の調和や復活の喜びを確かに語るが、これらはダンの個人的成長に比べれば二次的なものでしかない。「私は神のようであり、従って、悪魔は私と神を区別できない」と喜んでいる⁸¹⁾。

こういった想像を消えることのない恐怖——この章の冒頭で述べたダン自ら告白した「恐怖の罪」として読むのは明らかに正しいことである。ダンは自ら確認したことを誇張するために再確認するのである。固い決意の元で創られた活気に満ちた自己主張としてのあらゆる死のシュミレーションの背後には死は結局消滅することなのかもしれないという恐怖が漂っているのである。たとえ死が魂と肉体の分離でしかないとしてもそれでも死は嫌なものである。肉体が長い年月をかけで朽ちていくのをどうすることもできないという想いは人を苦しめるものである。だから、人間の身体は分解する腐った忌まわしいものだということについて容赦なく熱弁をふるうことになるのであり、それ故にダンの説教が知られることになるのである。こういった長い熱弁の背後にある心理的動機は明らかに自己防衛にあるように思われる。自分の恐怖を聴衆に向け直すことによってその恐怖を耐えられるものにするのである。心の中に潜む恐怖が聴衆にショックを与える華やかな彼の説教のレ

パートリーの一つとなるのであり、説教することによって恐怖を克服することができるのである。身体の崩壊を詳しく説く説教の中で最も早いものは1620年に行われたものである⁸²⁾。その頃までには妻、特に可愛がっていた息子のフランシス、娘のメアリーを亡くしていた。彼が愛し、子どもの頃から成長していくのを見ていた身体が朽ちて行くことを思うと、それがまた恐怖をより身近なものとしたのである。

ダンはいった恐怖に迫られているからこの世の終わりに尚存在するこれら人間の運命に関心を持つのである。説教の中でそれほど触れられているわけではないが、これがダンを夢中にさせた唯一の主たる神学的な死に関する見解である。ダンは説教で絶えずこのことに立ち返っており、彼の言っていることからダンが自らの意見を明らかにするためにたくさんの権威ある学者に相談をしていたことがわかる。聖書そのものの中にある明らかな混乱によって難問が引き起こされている。聖パウロがコリント人への第一の手紙第15章51節で「私たちすべては、眠り続けるのではなく、変えられるのです。」と言っている。この行の解釈が大いに論争を引き起こしている（「聖書のこの箇所についてはよく知らないし、多様に読まれている」とダンは言っている⁸³⁾）が、パウロが最後の審判の日に生きている人は死なないが栄光を受けるにふさわしい何か選択的な特別の処置を受けるのだと言っていると解釈することは可能である。聖クリサスタムを含む初期の権威ある学者たちはこんな風に、ダンが記しているように、テキストを解釈していた。しかし、もしこれが聖パウロの意味するところだとするとヘブル人への手紙第9章27節（「人間は一度だけ死ぬことと定まっている」）にある彼の言葉とは明らかに矛盾するし、詩篇第89章48節「誰が生きて死ぬのを見ない人がいるでしょうか」のような聖書の一節とは更に明確に矛盾する。この問題に関して多方面から議論するためにテキスト等を引用するダンは初期の注釈者たちが正しくて、人間は全て死ぬことはないと感じていたようである。1619年の説教では「決定し難い問題」ではあるが、キリストの再臨の時にこの世に生きている人々は死ぬ必要がなくて、パウロが意味するように「変えられる」ということはありうると結論づけている⁸⁴⁾。

この問題に学説上の関心以上のものを持ったのはダンが自分はこの幸運な少数の人たちの中の一人かもしれないと信じていたからである。1607年のグッディアー宛の手紙で「多分私は死なない」と書いている⁸⁵⁾。もちろん17世紀ではこれは突飛な考えではない。多くの人々がこの世の終わりが差し迫っていると思っており、終わりの日を予測しあつた。国教会としてはこういった予測に眉をひそめていた。予測しあう人々がやがて普通の個人としての生活を楽しむ時期が終わると最後の審判が来ると信じているせっかちな信徒の保護者と見られるようになった⁸⁶⁾。ダンは国教会の聖職者になっていたのだから、説教では、こういった黙示録的な夢に関しては冷静であった。にもかかわらず、この世の最後の段階で自分が実際生きておりコリント人への第一の手紙に述べられた生存者に自分が入るのだという望みを抱いていたのは明らかである。死のわずか4年前の1627年にダンは聴衆に向かってあなた方やあなた方の同時代人の人々は永遠に地面の下に眠る運命にあるか、あるいは「瞬く間に一瞬にして変えられる（どちらかは神のみぞ知る）。」のどちらかだと話した⁸⁷⁾。我々の言える限りではダンが実際自分が今わの際になって初めて自分が地面の下にいかなければならない、聖パウロによって予示されたきちんとした人生の出口は彼のものではないであろうという事実を甘

んじて受け入れたのである。最後の説教で、やつれて死に打ちのめされながらこの世を最後にする人の話題、彼らがいかに「変えられるか」に立ち返りながらも「今死にいく我々は」腐敗から逃れられないということを付け加えた⁸⁸⁾。

一方、ダンは長年聖パウロの言う変化が一体何を起こすのか、誰もが死ぬと書いてある聖書と変化がどのようにしたら一致するのかということを考えてきた。最終的には聖パウロはこの世の最後の人は死を避けるのではなく、死は単なる技術的なものだと言っているということにした。人体の構成要素は別々で、一瞬にして再び一つになる。これを天国に入るための偽りのない宿命だとみなすのである。「突然肉体と魂が分離することがある。それが死だ。そしてこの両者が突然一つになる。その瞬間が復活だ」とダンは説明している⁸⁹⁾。こうして肉体と魂はともに墓の崩壊からも、たいていの人間の魂が肉体と離れていなければならない死と復活の間の時期からも免れる。既に見たように、ダンは、特にこの時期を嫌っており、そのために聖パウロの逃避者たちの一人に教えられたいというダンの気持ちが一層よくわかる。即時の死と復活に関する結論に達するにはアウグスティヌスとアキナスの助けがあったのだが、しかし、二人ともダンよりずっとこの問題に関してははっきりしていないということは注目し得る。アウグスティヌスは、我々の「弱い理性」は最後の審判の日に生きている人々に何が起こるか予測できないが、「死の一瞬に永遠に入る」⁹⁰⁾という瞬間的な死を経験するのであろうと言っている。アキナスは、聖人たちはこの問題に関して意見が分かれているが、「より安全で、一般的な意見」は誰もが死に、復活するということだと述べている。ある人々にとってはこれら二つの作用が同時に起こるのかということについてはあえて判断を下していない⁹¹⁾。しかし、ダンにとってこの考えは、かつて取り付かれたものだが、非常に魅力的で捨て難く、視覚的に確かなものとして表している。この考えは死を連想するものから死を奪い取り、肉体と魂を一つにするので、彼の求めるものにふさわしいものである。また、同時に肉体と魂は瞬間的にはあれ別個に存在しその後輝きながら一つのものとなるので、死と復活に関するより伝統的な説明の中でダンが評価する統合的要素と自己を癒してくれる要素を維持してくれるのである。

パウロの言葉に関するこういった解釈を全面的に支持する最も初期の説教が、墓の中で肉体が崩壊することを初めて述べた1620年の説教と同じであることは単なる偶然ではないであろう。身の毛もよだつような恐ろしさに襲われながらも死のテーマと向き合うことができるのは自分が死から逃れられるという確かな直感が同時に働きその直感を信頼しているからである。この説教やその後の説教で繰り返し最後の審判に生き残る人々のことを「我々」と言う。「生き残る我々は雲に包まれであろう。」「我々は死ぬが、我々が死んだと他の人々が思う前に再び生き返る。」⁹²⁾「我々」はもちろん厳密な言葉使いではなく、「あの遠い時にたまたま生きている我等キリスト教徒」と同じ使い方である。しかし、既に見たようにダンはほぼ自分の生の終わりまで自分と共にいる人たちが地上最後の住民であることは充分ありうることだと信じているので、彼の言う「我々」は彼にとって漠然としたものではないということをはっきりしている。死に生を吹き込んだりあるいは死を否定したりするためのダンのあらゆる創造的戦略の中で、これが、通常のかなる意味でもダンが死ぬことはないであろうという願望を持続させてくれるので、最も力強いものであった。

こう理解すると何故ダンが「丸い地球の想像上の四隅に立って」の初めでしきりに最後の審判が大騒ぎをしないで行われるように求めたかが説明される。彼の見方によれば最後の審判の利点は歴史上他のどの人もずっとしてこなければならなかったように死と腐敗の必然性から自分を救い出すということである。詩に語られているように彼は「死の悲しみを味わうことのない」人々の一人なのであろう。この個人的な利点を確実なものにするために世界の破壊を命ずることもためらわない。これはダンに特徴的な自己中心癡を示すものである。この詩の第二節で結局彼を思いとどませたものは他人の命を短くしたり、他人の魂を最後の審判へと急がせていることを思っているからというよりは、近づく啓示が結局自分の救済を保障してくれないかもしれないというやっかいなことを想起したからである。

結論的に言えばダンは矛盾しているというよりは死に夢中になっているのである。一方では自殺に引き寄せられ、この病的な傾向が彼の詩の多くに表されている。他方死と死による無に跳ね返されるが多かったので作品の中で執拗かつ巧妙に死に生命を与え、説教の中で自分が死を免れた数少ない死すべきものの一人であるかのように好んで話す。この二つの傾向は矛盾するように見えるが、いずれも死を乗り越えたり、死の危機を解除したりする方法を構成するので、矛盾ではない。自殺は死を活発な生に変えるものである。ダンは死をぞっとする劇的な姿で表現する画家のように死を活気づけるのだが、模造品ではなく本物を描いているのだから更に見事に活気づけるのである。ダンにとって自殺者の内でも最も傑出した者はキリストで、キリストは自らの生命に、命が終わるように、終われと言うだけでよかったからである。キリストの死の命令は絶対で、死ぬのに必要なもの一切を要求することはなかった。キリストはダンと同じように自己充足しており、ダンは「臨終」で「行け」と言って自分と恋人を殺す。死はとりわけ個人的に侮蔑するものとしてダンを攻撃するので、このように死に優ることはダンにとって重要なことであった。埋められ、分解するということは、最後の説教で（他の全ての人と同じように腐っていくという事実到最后的に妥協した時）述べたように「最も不名誉で卑しむべき悪口」⁹³⁾であった。死について我々が最も尋ねたい質問——死は痛いのだろうか——に全く悩むことはなかったようだ。苦痛を心配するなんて彼の威厳に関わることであったろう。死はダンにとって侮蔑そのものであった。死はダンを生命のないものに戻す恐れがあった。人生においても詩においても無抵抗に服従することを拒絶した。「死に私を眠らせたくはない。」生きている限りはどんな死でも耐えることができたのである。

51) ゴス 第2巻 123ページ

52) 『説教集』 第2巻 248ページ

53) ボールド 343～345ページ

54) 『聖なる詩』 48～49ページ

55) P.ターナー訳 モア著 『ユートピア』 1965年 ペンギン版 125ページ

56) 『説教集』 第8巻 98ページ

57) 『説教集』 第5巻 249ページ

58) 『説教集』 第3巻 109ページ

- 59) 『説教集』 第3巻 97ページ, 第6巻 156・274ページ
- 60) 『説教集』 第7巻 115ページ
- 61) アウグスティヌス著 『神の都』 第22巻 19ページ, アクイナス著 『神学大全』 第3巻 Q.80 Art.4.
- 62) アウグスティヌス著 『神の都』 第22巻 19ページ, アクイナス著 『神学大全』 第3巻 Q.80 Art.5.
- 63) 『説教集』 第3巻 114ページ, 第4巻 74ページ, 第6巻 297ページ
- 64) 『聖なる詩』 8ページ
- 65) 『説教集』 第5巻 385ページ
- 66) 『説教集』 第4巻 358ページ, 第5巻 274ページ, 第6巻 75ページ
- 67) 『説教集』 第6巻 272ページ
- 68) 『聖なる詩』 50ページ
- 69) 『説教集』 第7巻 273ページ
- 70) ジョンソン 第1巻 140ページ
- 71) L.C.マーティン編 ヴォーン著 『作品集』 1957年 オックスフォード 第2版 420ページ
- 72) アクイナス著 『神学大全』 第3巻 Q.81, Art.1.
- 73) アウグスティヌス著 『神の都』 第22巻 15ページ
- 74) 『説教集』 第7巻 348ページ
- 75) ゴス 第2巻 261ページ
- 76) 『説教集』 第2巻 211ページ
- 77) 『聖なる詩』 51ページ
- 78) 『エレジー』 88ページ
- 79) 『エレジー』 73ページ, 90ページ
- 80) 『説教集』 第4巻 46ページ
- 81) 『説教集』 第9巻 89ページ
- 82) 『説教集』 第3巻 91ページ
- 83) 『説教集』 第4巻 74ページ
- 84) 『説教集』 第2巻 198, 204-205ページ 第1巻 232ページも参照
- 85) ゴス 第1巻 173ページ
- 86) キース・トーマス著 『宗教と魔法の衰退』 1971年 141~143ページ参照
- 87) 『説教集』 第8巻 97ページ
- 88) 『説教集』 第10巻 238ページ
- 89) 『説教集』 第3巻 103ページ
- 90) アウグスティヌス著 『神の都』 第20巻 20ページ
- 91) アクイナス著 『神学大全』 第3巻 Q.78 Art.1.
- 92) 『説教集』 第3巻 103ページ, 第4巻 74-75ページ
- 93) 『説教集』 第10巻 239ページ

(2009年12月9日 受理)